

氏名	笹岡 一慶
所属	獣医内科学教室
学年	博士課程 3 年
活動先名	Neurology and Neurosurgery Service, The Queen Mother Hospital for Animals, The Royal Veterinary College, United Kingdom
期間 ① (出発日―帰札日) ② (インターンシップ 実施開始日―終了日)	① 2018 年 10 月 13 日-11 月 5 日 ② 2018 年 10 月 15 日-11 月 3 日

活動目的

報告者はキャリアパスとして臨床と教育と研究を実践する大学教員を志している。本インターンシップにおいて世界的にトップクラスの獣医科大学に赴くことで、臨床獣医療、獣医学教育、臨床研究の実践とシステムを詳細かつ身近に経験し、運営実行に携わる大学教員と交流し、自らのキャリアパスにノウハウや課題、知的・人的財産を与えることを目的とした。さらに、臨床、教育、研究の各分野における個別の目標を設定し、これを達成できるよう活動を行った。

- ・【臨床】獣医てんかんクリニックの臨床活動と運営システムを学ぶ
- ・【教育】AVMA, EAEVE, RCVS, AVBC 完全取得大学における臨床教育の実態を知る
- ・【研究】Dr. Volk を始めとした獣医神経病学における国際的な人脈を作る

インターンシップ先を選択した理由

The Royal Veterinary College (RVC) を選択したきっかけと最大の理由は、Dr. Holger Volk がいることである。Dr. Volk は国際獣医てんかん特別委員会 (IVETF) の委員長を務めており、数多くの臨床研究および基礎研究を発表し獣医てんかん領域を牽引する人物である。Dr. Volk にお会いし、コネクションを作り、国際的な人脈を形成することが本インターンシップの目的の一つであった。また、RVC はそ

の Dr. Volk が Epilepsy Clinic を設立・運営しており、この活動を直接視察してくることで、本邦においても獣医てんかんセンター設立に向けた具体的な構想を得ることができるのではないかと考えた。

また、RVC は獣医学教育に関する認証である AVMA (American Veterinary Medical Association), EAEVE (European Association of Establishments of Veterinary Education), RCVS (Royal College of Veterinary Surgeons), AVBC (Australian Veterinary Boards Council) の完全取得を達成しており、国際的に教育レベルを担保されている教育施設である。ここでの臨床教育のシステムを見てくことで、大学教員を目指す自らのキャリアに重要な経験を与えることに繋がると考えた。

●活動内容・成果

インターンシップ活動の概要

本インターンシップは RVC の付属動物病院である Queen Mother Hospital for Animals (QMHA) の神経・神経外科に短期間訪問 (Visiting) として受け入れて頂いた。神経・神経外科が行う臨床活動 (外来、外科手術、救急、コンサルタント、ラウンド)、教育活動 (学生教育、卒後教育、セミナー)、研究活動 (Epilepsy clinic、レジデントの研究) に 3 週間密着した。活動概要や行動予定では週ごとに活動を分けるとしていたが、活動のほとんどが動物病院で



Fig 1. 附属動物病院 (QMHA) 外観

行われていたため、動物病院での活動が中心となった。また、診療や学習活動に関連して周辺施設 (Diagnostic lab、セミナー室など) に赴くこともあった。Table 1 にまとめた活動に3週間参加したというのが、報告者の活動内容そのものである。

報告者が訪問した際の神経・神経外科の構成は、シニアスタッフ (専門医を持つ臨床教員、Ph.D.は必須でない) 6名、レジデント (専門医資格と修士資格を目指す獣医師、3年間) 5名、動物看護師 (資格を有する royal veterinary nurse と資格なしの assistant) 9名がコアメンバーであった。さらに、他大学 (スウェーデン) からの3ヶ月間のレジデント 1名、他科レジデント (外科レジデントで神経外科症例経験のために一時的に神経科活動に参加) 1名、インターン (レジデントを目指す獣医師、1年間、4週ごとに各科ローテーション) 1名、テクニシャン (リハビリ専門、長期訪問中) 1名、学生 (神経科・神経外科を選択した学部5年生 (最終学年)、2週間ごとに各科ローテーション) 6名が入れ替わりで神経・神経外科の活動に参加していた。

臨床面における成果

Epilepsy clinic を知ることが臨床面での目標であったが、実際に行ってみると研究面で学ぶことが多かった。その理由は Epilepsy clinic がてんかん研究のフレームワークであったからである。(詳細は研究面にて。)

臨床獣医師として最大の成果は Neurology

には問診・身体検査と神経学的検査が最も重要ということを再認識できたことであった。

病院内を見ていて、良いと感じたシステムは他にもある。他の専門科へのコンサルがしやすいこと、基本的には担当制だがだれでも変わることができること、ホームドクターとの綿密なやり取り、検査や手術の時間と場所とスタッフの調整を行う hospital coordinator の存在、感染症対策などである。

教育面における成果

何よりも感じたことは学生の学びたいという意欲がとても強いことであった。そもそも大学が臨床獣医師を育成するということに向いているのだから、それを学びに来る学生は臨床獣医師になるために大学に来ている。シニアスタッフやレジデントが「この症例はどう?」「なんて表現する?」「鑑別は?」「次はどう考える?」と問いかけ、学生が必死に答えるという姿が印象的であった。学生が求めるものは獣医学教育の大きな流れによって今後変わるかもしれない。しかしながら、問いかけ続ける姿勢と正しくかつ使える知識を与え続ける姿勢は臨床教員としてあるべき姿だと感じた。

AVMA の査察に近いということで、病院のあちこちでペンキの塗り直しや新しい掲示物の設置が行われていた。認証継続は、アメリカの学生 (学費が高い) を獲得するためにも必要なんだと言っていた姿が印象的であった。とはいえ、学生を育てるという意識を病院のスタッフやシステムからひしひしと感じた。



Fig 2. Neurology team、朝のラウンドにて

時間		詳細
8:00-	朝セミナー	レジデント主体で、シニアスタッフが参加。月：MRI 読影会（前週症例）、火：neuroradiology seminar、水：Book club（輪読会、病理）、木：Journal club（論文紹介）
9:00-	ラウンド	オンクリニックの全スタッフ（シニア、レジデント、インターン、ナース、学生）が参加。入院症例と当日の初診、転科症例を約 30 分で確認。当日の予定を組む。慣れたら学生が発表。病院関連の報告もここで。
9:30-	診療活動	シニア 1 名（日ごとに交換）、予約外来レジデント 1 名、救急外来レジデント 1 名（週前半後半で交換）、で基本的に回していく。学生が一人で問診。外科手術はレジデントもシニアも基本受けた人が入るが、回らなければ他の人に入ってもらふ。オンクリニックの場合、病院出ていなくても開業医からのコンサルタント（電話相談）などに応じる。入院のリハビリはナースや学生がメインで行う。
15:00-	学生向けセミナー	シニアスタッフによる神経学、特に臨床に則した内容をセミナーとして行う。時間があればレジデントやインターンの獣医師も参加する。
16:00-	ラウンド	夕方のラウンド。内容は朝と同じ。朝夕のラウンド前後に入院処置を行う。
夜-朝 (休日)	診療活動 (昼の残り、 夜間診療)	診療が残っていれば終わるまで。夜間と休日は基本的には emergency team が対応するが、その中でも神経疾患を疑うものは神経科の救急担当（その日のシニアと救急外来レジデント）に連絡が回るため on call で待機する。救急度に応じて、電話口での対応、実際の対応が変わってくる。夜間や休日の待機学生もシフトで決まっており、この学生も待機している。

Table 1. QMHA neurology team の一日の活動

研究面における成果

シニアスタッフのうちの数人と、臨床獣医師でない研究者（Dr. Rowena Packer）とサポートスタッフ（Research assistant, Clinical Investigation Centre の専属ナース）からなる臨床研究・治験に関わるスタッフとそのシステムが Epilepsy clinic であった。その対象患者は QMHA の中でも治験に参加してくれる患者や健常ボランティアに絞られる。つまり、忙しい臨床現場と研究が同一の病院の中で分離して運営されていた。血液や毛髪、脳脊髄液、MRI 画像、脳波などのサンプリングが着々と行われているのが印象的であった。兼任するシニアもいるが、基本的には研究スタッフがしっかりと管理しているという印象であった。

また、シニアスタッフやレジデントはオフクリニックに回顧的な研究をしているとのことだった。Dr. De Decker (Head of neurology and neurosurgery) は「RVC が論文たくさん出しているのはなんでかって？それはオフクリニックがあるからだよ！」とおっしゃってい

た。シニアスタッフのオンとオフは 7:3 であり、オフクリニックには外国へ行って共同研究などもしているとのことであった。人員的・時間的に研究を分けることで成果を出しているという良い例であろう。

また、Dr. Holger Volk だけでなく、Dr. Rowena Packer や Dr. Steven De Decker, Dr. Alberta de Stefani, Dr. Elsa Beltran, Dr. Joe Fenn らシニアスタッフ、Dr. Simon, Dr. Sara, Dr. Sophie, Dr. Lydia, Dr. Sabrina, Dr. Bodil らレジデントとは今後もコンタクトを取り合いましょう！という関係性を築くことができた。

●今後のキャリアパスを考える上でどのようにプラスになったか。

渡航先での活動だけではなく申請書の作成も含めて、自らのキャリアパスに対する考えを整理する良い機会となった。キャリアパスに留まらず、自らの人生で何をしたいのかを見つめ直すことができた。結果、『臨床と教育と研究の 3 本柱で獣医学と人に貢献する』という自分

の軸を明確にすることが可能となり、この目標を達成するために大学教員として活動するというキャリアパスを立てることができた。

したがって、このキャリアパスに対して、いかにプラスになるように活動できるかが今回のインターンシップの課題となった。課題を明確化するため3つの目標を設定した。得られたことの詳細は活動内容・成果に記載した通りである。この情報量とこれを見てきた経験が成果である。いずれも自分にとって良い刺激となり、今後自分が活動していく上で大きな糧となったことは間違いない。次は、学んだことをどうやって実践していくかが課題である。

●後輩へのアドバイス

アクティブな活動が大切なのはいうまでもないことであるが、それが重要と分かっている、日本人のメンタリティとして海外や外環境ではなかなか積極的に動けないかもしれない。そのような場合、『自分の将来のため、何かを得て帰る』という強い意志を持つことで、活動せざるを得ない状況に追い込むことも重要である。成果のあるインターンシップとするために、以下の3点を意識し、インターン先の選択から申請書作成、インターン中の活動を行うことをおすすめする。

- ・目標と活動内容を自分のためになるように設定する
- ・実行内容は具体的に設定する

・訪問先では北大と自分の将来を背負っていることを意識する

言葉に関してはネイティブでないのだからかなりハンディになるが、身振り手振りを交え、話をするしかない。最終的には結局何をしているのかが見られるので、分からないからといって投げやりにならないことである。

また、本インターンシップは同分野の他大学の先生（日本獣医生命科学大学 神経科 長谷川大輔先生）のご尽力により実現した。当初より Dr. Volk のいる RVC に行きたいと考えていたが、学会でもお会いできず、つながりが全くない状況であった。そこで、Dr. Volk と知り合いである長谷川先生に最初のきっかけを作っていただくことになった。長谷川先生とは学会で挨拶や話をするといった交流のみであったが、報告者のインターンシップ打診依頼を快く引き受けてくださり、Dr. Volk との最初のつながりを作ることができた。普段からの交流が重要であると感じた瞬間であった。

●最後に

インターンシップ活動を通して、海外の大学を見る機会と自らのキャリアパスを考える機会を頂きました。このような貴重な機会を与えていただいたリーディング大学院と関係者の皆様、RVC neurology and neurosurgery service の皆様、日獣大 長谷川大輔先生、内科学教室の皆様に心より感謝申し上げます。

指導教員確認欄	指導教員所属・職・氏名 獣医内科学教室 教授 滝口満喜
---------	--------------------------------

※1 電子媒体を国際連携推進室・リーディング大学院担当に提出して下さい。

※2 インターンシップ先の担当者が活動内容を証明した文書（署名入り）を提出して下さい。

※3 本報告書はリーディングプログラムキャリアパス支援委員会で内容を確認します。その後、教務委員会で単位認定を受けることになります。

提出先：VETLOG

内線：9545 e-mail: leading@vetmed.hokudai.ac.jp